
カモミール・バスルーム

桃瀬ゆえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カモミール・バスルーム

【Nコード】

N5290H

【作者名】

桃瀬ゆえ

【あらすじ】

『僕は磨りガラスの向こうにいる彼女へと気のない返事を送る。』
湯気、お風呂場と脱衣所、反響する声、濁りガラス。薄壁一枚を隔てた二人の人物の一コマ。登場人物に名前はありません。身体特徴的な表現もあえて避けております。(2004年『Web小説きらら』投稿作品)

「ねえ。台所の流しとか使ってる時って、シャワーの出が悪くなったりしない？あれって凄く嫌なのよねー。何でなんだろう？」

「…知らないよ。」

ほわりほわりと湯舟から立ち上ってゆく湯気を眺めながら、磨りガラスの向こうにいる彼女へと気のない返事を送る。バスルームの中はリラックス出来る様にと使用したバスエッセンスの香りがしつこくない程度に漂っていて、僕は深呼吸と共にそれを吸い込んだ。

天井から落ちてきた水滴が冷たくて、逃げる様に深く身体を湯に沈めれば、濃度を増して少し息苦しい湯気が視界でキラキラと光る。視界を少しずらせば、磨りガラスの向こうに彼女のシルエットが見えた。

「ねえ、何でバスルームって磨りガラスが多いんだろうね？」

「…知らないよ。そんなこと、」

「顔洗って、ふと見たら誰かが立ってましたーなんてことがあったら嫌じゃない。ねえ？」

呑気な声音が二人分、バスルームの中で反響して耳に届く。バスルームに付き物の磨りガラスの扉と姿見。ふと顔を上げてそれらに何か映っていたら、確かに怖い。

湯舟にゆつたりと手足を伸ばしながら、「ところでさ、」染み込む温かさに声を震わせながら僕はそう切り出した。

「君は、誰なのかな？」

バスルームと脱衣所を隔てる磨りガラスは、彼女の姿を確認させてはくれない。ただ、「知らないの？そんなことも、」彼女がそんな言葉を吐き捨てて、怪しく妖しく笑っただけははっきり見えた気がした。

はっきりと、

(後書き)

名無し・人物特徴を描かないのが割りと好きです。

読み手様の中では、一体どんな人物が映っているのでしょうか？
どうぞ想像力で遊んで下さいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5290h/>

カモミール・バスルーム

2010年10月9日19時46分発行